再開高臺梅

へ遠13
1885

脇坂

栗枝亭鬼卯作

敵討再開高麗梅

全部六冊

大坂書肆　前川氏蔵

遠13
1855
1-6

冬五郎
咲や変成
男子義
香津新左衛門娘
おきん
山田段右衛門
山路
左右衛門
関口
内蔵之進

甲州の浪士
沼田郡蔵
後改名
須田官左衛門

大和の國
刀鍛冶清七
後改名
菊池主水

妙昌尼

岡村傳内
奴僕
善八

足鷹山の
賊
七九郎

高臺梅目次

巻一　赤津新左衛門家系沼田郡花ヶ谷并ニ郡花新右衛門を討火流布と盗を東國ニ趣くおえん後讐の志を立る事

巻二　沼田郡花河郡川崎城岡村修内ニ達し立身して後修内を討立退郡九郎おえん討討ふ趣歩く岩系治の事

巻三　おえん嵯峨の落宮ニ実母ニ名乗逢并ニ郡右衛門と修ふ弓削村にて敵を討ふ泰宮ニ趣七九郎ふ逢ふ郡右衛門山田にて病死の事

巻四　おえん七九郎ふ逢ふ末辻ふ雑賀ニ逢并ニ刀屋清七と謀ふ欠落仕損じ古市へ仕替ふ事

巻五　おえん古市ふ移り重代の刀を取戻し駕き喜八と謀ふ欲ル行方を尋ル并ニ刀西清七ニ東國ふ趣く事

巻六　おえん東國ふ旅立奥津川にて勇力とりふし奥國寺城下ふ移り本意を達ル并ニ菊池ニ水ふ再會し出世ル事

目次畢

再潤高臺梅巻之一

緒端

実に後京良院御宇天文の比播州ニ赤津新左衛門尉と云ふ者ありしに番神影ゝ為といふ者のうり業ふ先祖と称るゝ人王十七代に位天皇祇波津ニ祇園ふ詣りし時より代々氏ふ成り後抜古天皇の御代先祖乃豊臣倹庶侯ニ遊き唐士ニ仕る事年久し部曲天皇ル御時帰朝ル事後世ニ変り敵ふ業と絶ていでも子孫所絶ること事ハ古今伝かさ家柄ハ今の新左衛門尉実の人にて文武二ツ式兼ル上家筋業ハ妻ハ泉別岸和田右衛門佐仙哲と云る大醫ル娘にて夫婦睦まじく

苦しく久敷清代の家来ふたゝび面新左衛門と云つゝものゝ子なんよ泛て
汲術軍学をゝ国元へ結ひ忠義ゝ二乃男
うまれゝて新左衛門と名付又ゝ紀左衛門と呼ひくる
紀ゝよいかゝゝ四十ゝ九ゝ歟一ゝ人ゝ娘ゝ事ゝと憂ゝ
ゝ行ゝ清水の観音ゝ参り詣ゝ帰ゝ途ゝ
ゝ丹誠ゝ捨ゝ夫婦ゝ祈ゝ武運ゝ
新左衛門紀ゝ紀左衛門ゝ観音ゝ参ゝ信せんゝ参ゝ
水寺のゝ山ゝ月光寺の薮ゝ小児の泣ゝ
ゝ不思議ゝ思ひ主家ゝ
ゝ捨ゝ行ゝ新左衛門思ひ中ゝ
ゝ思ひ出せ捨ゝ行ゝ新左衛門
ゝ観音ゝ参ゝ

事むつゝと懐ゝ入ゝ宿所ゝ妻ゝ右の紙ゝ
女房もたに怪ひ懐ゝ出ゝ玉のごゝ女子紙冊ゝ
捨置ゝ
ゝ
乳母ゝ付て養育ゝ月ゝ花ゝ
思ひ
歌
軍家ゝ御目見ゝ家
士ゝ妻ゝ
さゝ右近ゝ夫婦の中睦ゝ
ゝ男子ゝ人の娘ゝ

肩々に番頭新左衛門と八代々恐家ありしときて右近と菜
道とをく新左衛門も此道より妻しくまこび打ち合ひ嫁ようまう
一日止宿して菜屋と倫じ合席と侍しる或日新左衛門
妻娘ども打寄見合をなして拾び居る新母もお源と抱て
うしの見と慶ひ合ひ右近新左衛門も菜屋へ来こいよ礼
愛ようと打寄て見と慶ひ合るが右近乳母が抱るお源と
つくづく見て扨〳〵美しき小児なる成人の後は揚巻紫町
もれしるまじ某も迂闊一ぞ礼ようけ行る是下の家某う
家勿代〳〵回家なまこもうしと縁と結び事もいかく
まよ連絡〳〵お積とる事中〳〵容易ならぬふ礼ぞ礼まと
系が男子と今ようと号礼し亜成人の婚姻さを両家

の内次男が生乃方ようと名跡とえび新左衛門の人意と
此行よ結ると頼るよ新左衛門夫婦大よ恢ひまに申しとる礼
家柄此方分形ふ名さよた宮〳〵事の嫁〳〵さ〳〵妻礼見合
の行く礼貴君よ系ようもび肌よ付させ亜婚姻の云一
緒よようとび〳〵と見の行く〳〵と右近よ渡せば是ハ一無ろる事
見合てふるも背妹脊のかく〳〵ひかるひなるこるる礼
ぞ〳〵礼るちりと酒汲ハ〳〵是ようハ親戚の聴とるてまた
ゑびもの成人と結ろ礼紅るに天文九年庚子の年天下大
銭一疫よ京列紀列ハ大清寺ハ民家悪く海中小浸し
新るくなり家敏と志び此墓地右近が屋敷も演みに
ハ〳〵礼ハ大清寺て家人とも何国へ行くん礼もるくなり

くれば、ひるの香は新左衛門方へ、周章大うろたえ、右近左衛門莫逆の友なれば、一子清之助事は娘お縁と云号せし、その頃に家人共も流失せる事、誠に天運とは云ながら、清之助世乃をさなやと夫婦共よろこぶ時、幼子いうぐるし、や後の幸とぞ、

新左衛門が隣家江田新義が倍

誠に異なれの移り行事矣よりもまく、新左衛門が娘お縁こと、十六才に成る天のおせいにつくしさんざ面おもふ、くるまお者糸行の乃よう、ぞうしば文母と者ん源ろしば新左衛門も娘が為に万金を費し、清義と名づけ衣裳の拵などのくまを夫婦とも云合せ結ぶ上もよう色と思ふ親ん達て理ちまこと、又新左衛門が隣家

江田新義と云る浪人ひろ紙ハ甲州武田家の家臣たりしが戦場よりて拘見仕換じてそれ加よ浪人して今ハ大坂の辺よ、かくれ不縁と永ハ級術乃拵もして善せ、ぐ弟子も次第よ付今ハ世ゆるやかに暮ら、が新左衛門ハ隣家江田新義方へ周章大うろたえ、右近左衛門莫逆の友なれば、一子清之助事は娘お縁と云号せ、その頃に家人共も流失せる事、誠に天運とは云ながら、清之助世乃をさなやと夫婦共よろこぶ時、幼子いうぐるし、や後の幸とぞ、

新左衛門が隣家江田新義が倍

誠に異なれの移り行事矣よりもまく、新左衛門が娘お縁こと、十六才に成る天のおせいにつくしさんざ面おもふ、くるまお者糸行の乃よう、ぞうしば文母と者ん源ろしば新左衛門も娘が為に万金を費し、清義と名づけ衣裳の拵などのくまを夫婦とも云合せ結ぶ上もよう色と思ふ親ん達て理ちまこと、又新左衛門が隣家

同舟の若ハ甚おとりて、終ら、ぐるが武日夏日諸展して甚ハ園ミるがゝ新義一同ども歌ふ土用平ゝ人ハ武ゝ馬具不せ、し絵を新義新左衛門ハて法石ゝ家柄ゝ拵ゝ新義ハ駄衣山ゝ具ゝ上ゝの上ゝ脇ゝ絵ゝ落ハ廣蓋ゝ入ゝ一拘ハ何ゝいやゝ弱ゝれば新左衛門ゝて乃の恥ハ家ハ先祖道豊臣推古の心字捻唐使ハ後世新義の昆情来ゝ火流布ゝ拘ゝて南方の海ゝ火山ゝ燕然山と

高臺梅卷之一
九
高臺梅卷之一
十
文春 大吉
香津新左門尼寺の
やうゝそ子と拾ふ図

いふ者ゝ火焔ゝる洞ゝ年ゝ生ゝ火風ゝ毛玉
毛色とりゝ織ゝる紙火流巾と
おゝ長の絹とゝ見るに何も赤き地合て
くゝゝる火新花ゝつゝ色と見終ゝ取ゝ
此不拘ゝ義ゝ及ゝ共ゝ目ゝ
表ゝゝと新るゝ者ハ今ゝ初ゝ
ゝハゝゝ火よくゝ焼ゝ
も焼ぬゝゝ
新花も
名産又ハ
平の

ゝ家家ハ仁徳帝ゝ今ゝ連綿ゝて
宝祚ゝゝ
ゝ年ゝ元年ゝ
も今二八の嫁入盛なゝ
ハ隠居せんと思ふ女房ハ
行の取ゝ右近殿ゝ
バ舞とゝゝ
うつぶいゝゝゝ
ゝ号せ
今ハ死も
ゝ

新左衛門ハ不興し菊池太近大濤にて行末ながくと頼みけるに最早十余
年今に生死のほどを聞ざれバ正しく魚腹に葬られしものならんハいづる
まじまとなく縁なく御卒相応ハ姿小町のごとく老功て聟を
取らんとてなかなか彼の太近より結納をおくりしもなかなか
とりのべのうらだとおもふる母ハ気の毒に思ひ娘がやうす女の児たる
まじバまつりごとの思ふハ僻ミに偏くん志らバ今年中に八聟
のことを尾合太近殿の行末を案しく思させるともの子ハ酒清
ころが死失ありバ六せいの家柄なれバ明年ハ聟がひとさえの
娘ハ母がかくいふに遠慮ハいつるまじと理非をわけての詞にお縁
まんころハそのまゝども志らバ今年中ハ尾合てふびのくと漸ゝ
おふかいりなれとも新左衛門ハ内ゝ聟を取らんふ

将軍孫茂を集めて沼田顕元黒村傳内に封面の旅
その頃駿河國府の城主今川義元ハ威勢さかん下し四将軍の
名をもとめられ、名を旗下に従ひ東国に並ぶ大名もなかり
ける家士小黒村傳内といふものハ元甲州武田家に仕へ
が御のあるて甲州を退き今川に属して七百石を領し義元
の帰し伽によりて武らき義元傳内に向ひやさしくハ孫将軍
を召して東国に威勢を震ふも大きなる志しありて
当時京都将軍名物孫茂を好まるゝにより名産
孫茂を献上なし家も何ぞ近上の感に預らんと思ふも尾面
かし召をなし何にても当世にあるき衆を選集めて償の事
ハ望に任すべしとありけれバ傳内謹て承りしより献上すべき

殺まごゝろ中〳〵重仁の示しそ八法人の国式醫將軍の海
盛おそる幸ひるまぐくひ系結〳〵吟味仕るべしと正信ア
吏ようおくるまを筋と永弱るといぶもお無の弱もちくん紙
労しくなる紙るまを年今川家より將軍家へ毒の献上ひる
ゝ侍内式仮と家ゝ上京して毒尾結献上お納りお仕拘ゑど
て山眼下されを坂る道日の岩峠とるふ絶て久しく者住
せざる沼田新義笠傾て打るると軽しと味留させ家拘よう
を新ら紙新義見ゝなまば侍内を八〳〵と斗軽ゝ留もゝ
しゞ良ひて新義ヤくるハ拘〳〵面目もる紀對面甲府と
て八水魚の交りとおせしも元今八何分ゝ居ゝやと新
まば侍内も撰まと打さまばゝゝ幸斗らぐも今川家ゝ仕

寵し祿七百石を給じ者紙也そ新義也
をゝ赤ゝ面目もるさ式身の上甲府と之退侍く漂泊し今ゝ仕
おせし幸もゝく大坂る使ゝ清間しき業八移せども毒カハ
もるさば紙郷の指南ゝ毒義金と輪ゝ敷しげゝ者
侍内つくゝと国ゝたゝんゝ弱さる紙思ひゝふゝ悲八紀
と又仕合もゝるゝ〳〵しく結事と絶しゞ侍内ふと思ひつき
ゝ人今川殿天下ゝ幸ゝる名拘と新ゝゝ紙八今將軍家
一ゝと家のゝまれゝ仕度ゝ元お奇れ是ゝゝ
ゝと付ゝ正ゝ身の筋ゝもおゞ〳〵何ゝく吐しゝる新
義ふと香港新左衛門が大流布の車と思ひゝ抜者迫和ゝ
大流布とゝ拘と不持の沼人ゝゝ紙ゝ付て八長〳〵ゝ

けうと接唐使の給仕の者に結来せ一事と一〜味をよく侍内大臣
びを玄彼新左衛門よりもよさせらまこよさもれば武功なるを元
るまこバ拙成して主人の抱と成こさハ若の朋友ゑ一ツは主人
一働よも御成事ありとやみぞ新左衛門大よ悦び斗らびも今日は
用よそうり此の品味兼るもいまぐ武運よそざ品志るこの沢
新左衛門よ体ゐハ否こんしやまぐ見ゑ出状をこん出を合ヤ〜
見くハ抜去宿不の書付ありと失之元出し鼻紙ゑ認渡し
久保侍内恢び備事出状こてヤ〜こ角堅固よ抜抜
之別久新左衛門ハ之身の筋ゑ来ありこ元も上るゐ地て夫
新左衛門よ大坂さ〜てやりうゐ

新左衛門よ大浣布と申紙

新左衛門ハ此月大坂よ渡り新左衛門ゑ大浣布のよと勢
元おさせ元身せんこのと元元ぐ〜よ老番ゑが宅へ来りる
よ奥元数まて娘お縁ゑ琴の調と青よ酒春居りりゐよん
易新左衛門ハて元よ着べ見ハ紙りて此弱余り侍然さて他人
夫せ元の手〜一ツ進上致こんと元とつてさ〜れば新左衛元
ようゑ和の酒ゑ元ハ元和へ糸り仕合ありと引侍数至
紙ゑ辞よ糸じて侍内よ元こりて対面〜今川家ゑ天下の
名相献上りう元思石孫〜きゑ和もはくべ元ゐ安りよ紙を
元〜元元身よ元ゑ元身よ元ゑ事と朋友の恩志よ糸ふと此ゑ拒
の大浣布のよ紙ヤ〜ち〜兼りヤ〜元」と申せ」よ様の和悦び途
中のよ人要細書状よ元合ヤ元〜と別ヤ〜りかゆ仁共

何とやらん抜たる刀彼度ゆへ此家より秘し
置れてはいまだあるを家と伝へ埋置たるまゝ今川家へ左上ありく
ゆへ将軍家の仙国より来りし刀なるゆへ
て大流布と今川家へ左ありしのへと已ゝ揚まがちあるゆゑ
きハ新左衛門と呼ぶ人ハ国孫一ゝ名ハ私の名と思ひ仕下
さるゝ時ゝ俗彼ハ自分仙味一ゝ先祖よりの伝来ゆゑ
いろゝの事ありてもかへ申ゆゑ左上ハ宿武年
ゝ利将軍政之和孫の名ゆゑと仙集ゆの時先祖新左衛門
大流布の名ゆゑ仙作ゆさる仙大中流と申し仙先と家
るゆゑとやうとうゆゑ一先仙上流ゆうゝさようゆて是非ゆ
くゝもゝ仙十日年仙間意を後仙座ゝにつて是る名抜

抜ゝさるゆゑ抜ゆ秘代ゆ仙絶ゆき家命と仙業ゆへ新
左衛門ゆへ也ゆる事ゆるまゝ永く家
ゆ紙抜ゆゆゝて代ゆ仙ゆ
中ゝ切ん不仕抜ゆの了間も仙国ゆゝ内近代無念の仙
扶抜ゆゆゝとの仙ゆる事質乃新左衛門ゆ絶ゆ一云
ゆ流石の新左も赤面ゆて
その先を別ゆゝ仙ゆゝ仙

新左衛門ゆ古狸と見て新左衛門と紛て立退仙

是ゝゆて金ゝからんゆゝハ
田新左ハ已ゝ立身ゆ世ゆ眼ゝゝ人の室ゆて世ゆ是
ゆる案のゝゝ新左ゆゆ立ゆ仙ゆ会今ハ新の縁も

沼田郡蔵
火流布を
うぐい取
新左ヱ門
を討て
立退く

さてハ果忙然として来りしかバ心易く打入せし新左衛門方留守何
とやらん心もとなきを忍ぬる折から駿府岡村伝内方より
書状到来し先日新作殿ハ火浣布の事主人献元に咄し
ぐハ殊の外悦び一刻もはやく差渡よと有てその方の手尾を
待るゝとの恩賞にて有候三百石に召抱らるべしとの委細
も申候新作ハ事少へむかしまゝに暮ろ主人ハお伺ひ火浣布
まつ殿其ハ要用ハ申ておこの文斗ありしが新蔵大
に驚き扨ハ兼て忍する伝内が手斗かく此方へ一通の手紙
もあらバはやく付の知行まで申越る事今更先方へ
せし不合点成さねどそれとも甚だ危せん角せんと心ぐるしき
しが元より自身に眼くらみし新蔵を上三百石にぞ誘はん

との事にまん心まよひ忽悪心きざし此上ハ伝内へ此方より
所をよ紀ハ士の侍者といゝまゝんも口惜き事なり人忘れ
先宝蔵へ忍入盗とつて欠落し駿府へ立越んものと一念
起りしよりそれくし互に書を認め近日火浣布持参可致と
申送しその後折からハ忍入盗ありさんとんをぬるもて悲しきさん
あらバや人欲の私曲へ身を忘るを者今に始ぬ事なりて浅間
しき事どもあり此ハ神無月いとくさむ時雨がちなる夕つ
暮新左衛門方かくれ住るハ先祖の五十年忌とて法事を営
く菩提所にて譜代の家来共を新左衛門彼是世話とやらさ知
理様開がしく初夜も立ち過ぎの折から浜田新
蔵ハ早くぞ天のたすけなりと上手風烈しくなるかれハおもひ

うけ居るうち宵の内に忍入盗もさるものとて身を潜て一腰だつ
のみ新左衛門が伺ふよしと縁へしのびかくれけれバ此まで
と庭の枝折戸押明座敷と居間との堺なる文庫箱を
立退て行まハ銭家具皿鉢など運送りしと見へて、未
戸口に錠も下さず一寸計明て行けれバ是幸としのび
入二階へなんなく忍入兼て用意の燧打て蝋燭へ火を
移しかねまくらと尋るに鏡茶箪笥小長持など有
鏡台の引出錠捻切蓋引明見てゆけバ先日見しによまげふくと有さ大
浣布の箱ありハ二重箱より引出し明り吹消懐に入そろ
そろと梯子をおりる台口へ来るに新左衛門手飼の犬来
り新左衛門といふと見し頻りに吠かゝるをいふと足にて蹴新左衛

ハ寝耳に聞付むつくと起やうすきを犬かゝると脇差を手に引提て
障子をあけて見し引明るとうんの拍子に叶ハじと新左衛門ハ是ハと抜
て切りけるか心得たりとぬき離さんとするに細織の紐をまきつけ
引ちぎらんとする所を強気の新左衛門寄つけて抱とも息もいまだ切付
しに何かハりてまるでき眉間より乳の下まで切下げ膝づし
新左衛門ハ十六才を一期として倒れ伏を盗人ハ刀引提裏なる
いつさんに行来も走りよりて此物音におどろきし女房娘家
内の男女遅々に能集りけるとしていりけり新左衛門見るより
まくハ行ずし者ども挑灯とぼし隈々を残らず探しと下部
うち妻娘ハ前後正体泣倒れて死骸を押動し抱起し
けりさるハ目も当られぬ風情なり下男ども盗人の跡くを尋

ゞ出宝の入しを度義の小長持箱と接切内へうらよりとりて女房おそれ仁付扨いらの大流布と盗ゑしをて歌い隣の江田新蔵と和こ新そそそ子ゆハ此る書うて此宝とかゝ出づまと勧よ新左実敵よ祇しうらと赤面してゆりしゞ身の愁よ茶ひまと雲しを集ひ之遁しをあるうんとい自家来ゞも隣しまり見てけるまバいつの間ようハ新義と書て歌悲す大方ゞ内よ家来ゞ和せよ依て峯和田吉也仙拾と来り一ゝ園屋敷惨傷してけるゞ新てハ県と野ゞ色よ送り表流ゞ栄と色ゝを新左実つよいゝ中しを方敗幸勧る幸うまゞい気ゞ入すハるしゝいでも女斗ゞまゞいん寄ひる

る一ゝ尚ゞ後家おゝさ孫お縁と家お方へ引れお熱の聟と園出一ゝ和績させんをまをへを方家守してけるゞしと駕よ祭岸和田ゆりゞしハ新左実ゞくの家来よ賜と寄しゝ兵主人ゞ家と守り居るまゞ不滅の所とハ云るゞゝうしてかゝり幸ゝもかり

お縁復讐の志と為る話

新て吉也仙拾ハ新左実ゞ後家娘と新り是よ祇聟と云て番頭の家と云んと不ゝ聟と園合せゝもお縁いさゝに文引ゝ正しく欲ハ江田新義と為るゞゝを生ゞく幸行方口塞するゞやぬ家男子ゞ子ゞ先より仇討よ出ゞをよゝうゝゝゝと祇父の方よ養ゝゝ幸の子ゞをゞも祇よ家よハ拾ひよゝ園ぬをハ往を実のまゝゝハ女よゝゝも欲と対ゝをよ拾ひよ少ゝをゞゝ兵して聟とゝゝいんゝと書ゞ人よ後拾さゝよをゞまんよのロ塞さゝよをゞまゞも歌を

剱御の師範ともなるべし大欲女の力にて中〻後世のゑ思ひも寄
ざる只佛神の力をもつていおもとを遂るまでと一心に思ひ込
よう河内の国志貴山毘沙門天に祈誓をかけ七日断食して剱御
上達をこいねがとゝびやくと願ひくるこゝて結構なる七日満ち
剱の義に世をとを通りしに二ツの牛角と角とを合せ牛〻と双のま
ときをもつて引分るとゆめこゝて覚ばお縁を義と大に悦び家に力
なハ我志義をもんとんと納め義の時に成て義に生てをを洗
河内の方とふ〻ねと傍とゝるに仙哲が養子に入ると
極色に成ると夕をの義正義なるハ此女引抜力とゝびの
振袖をきと大木の柱と思いとゝ引抜よいとん安く大根抜
抜ようと安〻しハ毘沙門天の利生なり毘義と娘てきるんに伝

らば悦幸限なく是なハ何卒剱御を学ぶんとんを願ハくに岸和
田藩中に関口内義をとゝるに人吉也仙哲に兼〻入魂なる此師
癪気のよう日〻仙哲方に業を学に一僕を遣ハ此人を
家中一の剱御達人門弟数多ありて誠に渥深の君子なるべ縁
ハ行とて此人に剱御を学んと日家人を呼せども女の者を
便もなくさハ伝に成ハ武日又〻内義〻を来らき
に仙哲病用にて義をまいお縁業〻〻を指出るのを
扶持もるに関口不審ぶかお縁を孫を元ハ見知ぬ婦人なりの
ように方に居〻るに尋るに お縁金銭にて此家ハ仙哲が孫
孫と申者大坂表香港新左衛門娘に内義〻を打殺き
るなど先祖香港氏の一件仙哲老に兼て入嫁に殺傷加人

暫く此方に而運気を待といふにお縁ハ結折と成て縁あり而網大掟
表れる所閉の上ハ隠れるに及バざれ付たる寺ぞふ所願が上にあ
義所存といふに内蔵を進員と到来る婦人の素に願といふあり事
小作中にて見うるまじよと何んあるく若へまバお縁まうさと思ふ所願
ハ何もなく何とぞ級術所指南に願ひきしと思ひゑてく願れバ
内蔵をと暫く拙ても手く行りぬるが早く彼らんと是かしこハ
思ひ寄らぬ願ひあるかく深き望ありての事と推察いたし
さるにいつもんねんある志じ此不ハ其り指南まるとき八人乃
同じ主匠じる渡し幸案が娘を是元と同年位にてあるまじハ家
方へ引取女のちつけとも同じく学せんと云て引とるべしはず
隠密にせられまじよと云合る所へ吉野仙哲云添まじハ関口も一通の

挨拶して扨お縁が事を白ゐるは分引取まじよし幸案か娘何角
不調法まるまじハ縫ものの指南にも致りなし願く所存下さるべしとの
事なれハ仙哲もお縁も何も成丈まじハ町家に行って深尾まで
ハ後悔せん親慎き関口氏に預んハさるあ覚の事なりとさま
一さらき此方の所願ひ中ぬ推よし何分宜しく頼むと以てに内蔵を
し進も悦び是らハ明日かきハさるべしと約束しゆうまじハお縁
大に悦び是偏に志貴山の毘沙門天の所利生なりんと翌日を
関口の方へ引移り日夜級術稽古まるに一心凝らるお縁を上毘
沙門が授りし力量まじハ中々兵人の及ぶ所にはあらじ一を聞て十
と悟るの才もあまじハ関口の門人内にて一二の弟子と業なるまじハ内蔵
も是ハ渠が儀の志と感じ格別に心を尽し秘伝の太刀筋を

教へ給ふ様よ御縁の天教よんと云へ同門の学問をよと志して初よ
ふまことてハ玉章をかと徒へ投入ゝれ共もよかさへとゝ〻ば折とてゝゝこて
よ関口の弓場山四郎左衛門とゝて六尺五寸余の大男家中一の大力
剣術も彼よ及者なゝれば漫んと生じ天下よ敵なしとおこりけ
るゝお縁が起をよんとゝひさるゝ〻ゝ〻と耳ゝも関入ゝ
今ハ大よ心よ思ひ教をこゝて天ゝゝゝ心ハ扨ゝゝつまゝ形ゝやつ小
己藝右よ事奇脱骨打打序論よして腰ゝんと関口が前よ
お縁事剣法大よ上達ゝゝゝ系之介て教示して安ハさん
とゝゝゝ思よゝゝゝゝば内義ゝをハんも射ゝ是下ハ系ゝゝ弟
ゝゝとハ一ゝ之介て安ハさゝれば弟も恨び中さんとお縁と峰ゝし
之介ゝゝとゝゝよお縁ハ思ゝゝ心を悔ゝ恥の義類ゝ

油断なゝゝと小妻引上眼をくゝゝひゝゝゝゝば腰右手つハ右右刀と共白
ゝゝかさゝ只一打と切てくゝる武ゝゝとゝゝゝゝ文つ流一つ武
しゝ腰右手ゝゝ思いとゝゝて打ゝ脱ゝと引ゝゝく者よと見ゝゝが一
之間打付ゝゝば腰骨をゝゝゝゝ折頻ゝ志ゝゝゝゝゝ志ゝゝゝ
恥しゝゝゝゝゝん手場ゝゝゝゝ安ゝゝる関口ハゝゝゝゝゝ天晴
手拭上ハ袂をひゝゝゝゝゝゝゝゝば仙哲老の方ゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝ内義ゝゝゝゝゝゝ感ゝゝゝゝ

再興高麗梅巻之一